

あなたに薦める『この一冊』10月

『こころ』夏目漱石 著 新潮社[他]

英語教諭 奈良 充康
高校 3年9組・10組
副担任



明治の文豪夏目漱石の長編小説。有名な作品で国語の教科書にも取り上げられていろいろな場で内容が紹介されている作品なので、誰もが一度は読んだかあるいは読んだことはなくてもあらすじはよく知っているといった作品ではないでしょうか。親友を裏切ったという、孤独な罪の意識はいつまでも消えず、精神的な苦悩は現代でも解決策はありません。この作品は多くの人があらすじをよく知っている作品ではありますが、読むたびに読者の側の受け止め方が変化してきます。理由は年齢や人生経験や読んだ回数等いろいろ考えられますが、断定することはできません。あらすじが分かっていると何度も読み返すと面白くなるものですが、この作品は読めば読むほどより深く内容について考えられ、決して飽きることなく、読むたびに読者の心を惹きつける作品だと思います。一度だけではなく、是非とも何度も読み返してほしいと思います。

著者『夏目漱石(ナツメ ソウセキ)』豆知識

小説家。英文学者。東京出身。本名、金之助。帝国大学英文科卒。大学時代正岡子規と親交があり俳句をつくる。松山中学教諭、五高教授を経て、明治33年(1900)イギリスに留学、帰国後一高、東京帝大で英文学を講義。同38年「吾輩は猫である」により作家として出発、続いて「坊っちゃん」「草枕」などを発表して当時文壇を席捲していた自然主義文学と対比する位置を占めた。同40年教壇を退き、東京朝日新聞に入社、執筆に専念。近代的知性に基づき倫理的主題を追求する数多くの作品を書き、晩年には「則天去私」を唱えた。

出典：デジタル大辞泉, JapanKnowledge Lib



★奈良 充康(ナラ ミチヤス)先生の紹介★

- *担当科目・クラス
コミュニケーション英語(高3年9組～14組)
英語演習(高3年15組)
- *星座→いて座
- *趣味→ サッカー観戦・ドラマ鑑賞
- *自分の中学・高校生活
目立たないように過ごしていました。
- *本校生の印象
礼儀正しく、挨拶がしっかりできて好感が持てます。
- *感動した本
「アポロ13」ジム・ラベル[他][著]新潮社
- *読むことが望ましい本
「三銃士」アレクサンドル・デュマ[著]岩波書店[他]

その他本学図書館所蔵夏目漱石作品の紹介

・ 虞美人草 新潮社[他]



大学卒業のとき恩賜の銀時計を貰ったほどの秀才小野。彼の心は、傲慢で虚栄心の強い美しい女性藤尾と、古風でもの静かな恩師の娘小夜子との間で激しく揺れ動く。彼は、貧しさからぬけ出すために、いったんは小夜子との縁談を断るが……。やがて、小野の抱いた打算は、藤尾を悲劇に導く。東京帝大講師をやめて朝日新聞に入社し、職業的作家になる道を選んだ夏目漱石の最初の作品。

・ 夢十夜 海王社[他]

こんな夢を見た。「百年、私の墓の傍に坐って待っていて下さい。きっと逢いに来ますから」そう云って絶え果てた女を埋めるため、男は真珠貝で穴を掘る。そして丸い墓石の傍で百年待った——。10篇の幻想的な夢の情景を写し出す『夢十夜』。可憐な文鳥の死を淡々とした筆致で描く名作『文鳥』、ほか『永日小品』を収録した短篇集。声優・宮野真守が紡ぐ『夢十夜』名場面抜粋の朗読CDを封入。



・ 彼岸過迄 新潮社[他]



誠実だが行動力のない内向的性格の須永と、純粋な感情を持ち恐れるところなく行動する彼の従妹の千代子。愛しながらも彼女を恐れている須永と、彼の煮えきらなさにはらだち、時には嘲笑しながらも心の底では惹かれている千代子との恋愛問題を主軸に、自意識をもてあます内向的な近代知識人の苦悩を描く。須永に自分自身を重ねた漱石の自己との血みどろの闘いはこれから始まる。

・ 三四郎 ゴマブックス[他]



「日本より頭の中のほうが広いでしょう」……ヨコガキ×三四郎。パブリックドメイン化、いわゆる著作権が切れた国内の名作文学を横書きにして刊行された『ケータイ名作文学シリーズ』の内の1冊。従来の縦書きの本が苦手なあなたへ。

・ 漱石俳句集 岩波書店

漱石は親友子規の感化で俳句をつくり生涯におよそ2600句を残した。明治28～32年はとりわけ熱心に作句にはげんだ時期で、子規は、この頃の漱石の俳句を評して意匠が斬新で句法もまた自在だと言っている。全作品から848句を選び脚注を付した。



編集後記：「僕本月本日(1904年4月14日)を以て目出度死去仕候間此段広告仕候也」——これは明治37(1904)年4月14日の朝日新聞と万朝報に掲載された訃報です。なんとこれは、「吾輩は猫である」のモデルとなった、漱石が実際に飼っていた猫の死亡通知。知人から「吾輩の戒名もなき芒かな(高浜虚子)」、「先生の猫が死にたる夜寒かな(松根東洋城)」などの句が送られ、漱石自身もその墓に「この下に稲妻起こる宵あらん」との句を書きつけた、という話が残っています。現在に名を残す文豪は、友人・知人たちが巻き込み、昨今の「猫ブーム」も大いに先取りしていたようですね。